

日本人の権威主義のパーソナリティ に関する研究（1）

社会的属性等との関係について

——東京都23区を対象とした調査研究——

齊 藤 哲 雄

1. はじめに

これまで、日本人の権威主義のパーソナリティについての本格的な研究は、1954年の城戸浩太郎、杉政孝の共同執筆による『社会意識の構造——東京都における社会的成層と社会意識の調査研究（二）』（『社会学評論』第四卷、一、二合併号、74～100頁）以外には遭遇したことがない。その彼らの研究も現在においては古典と化している。

彼らはアドルノ（T. W. Adorno）らによって権威主義的性格構造の主要特性として数えられた諸特徴の枠のなかに、日本的な「伝統的価値、態度体系¹⁾」の特性を投げ込み、十二項目より成る権威主義的態度の尺度を作成し、権威主義的性格と社会的属性等との関係を明らかにしようとした。彼らの発想と方法は原理的には評価できるが、現在において彼らの作成した尺度をそのまま使用することは問題の重要な側面を見落とす危険性が多分にある。彼らが作成した尺度や調査には、次のような問題点があると考える。

第1に、彼らが用いた質問項目そのものに不備な点が多く見られることである。それは成年男子が成年女子の一方のみを対象とした調査に適用し得るものであり、用語についても特定の集団を連想させるものや、被調査者の経験や知識によって受け取り方が大きく異なると考えられるものも見られる。

第2に、権威主義のパーソナリティに関する発達心理学的な観点から

の把握が欠如していることである。たとえば権威主義のパーソナリティは、幼児期より形成され始めるという根底的な形成条件を考慮に入れていないため、理論と調査結果に不均衡が生じている場合もある。

第3に、第1、第2の理由に関連して、権威主義のパーソナリティと部分的な社会的属性、すなわち職業、学歴、年齢、支持政党との関連に限定されていることである。彼らはこれらの社会的属性に基づいて、重回帰方程式を立てているが、このほか性別、宗教、イデオロギー等との関連を考慮する必要がある。

第4に、社会的権威の変化、もしくは消滅は、社会的な価値観の変化によるものであるから、当時の価値観を基調に作成した質問項目の中には、現在では採用できないものも含まれている。

私の「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究」は、(1) 権威主義のパーソナリティの形成、(2) 社会的属性等との関係について、(3) 天皇制に対する態度と権威主義のパーソナリティ、(4) ファシズム、ナショナリズム、軍国主義と権威主義のパーソナリティの4本柱から成る。

小論においては、まず先に指摘した城戸達の4つの問題点を修正し、現代に適合するように権威主義のパーソナリティを測定するスケールを作成し、それを用いて、(2) 日本人の権威主義のパーソナリティと社会的属性等との関係を述べたい。

2. 権威主義のパーソナリティとその性向

一般には、伝統(tradition)と伝統主義(traditionalism)が、しばしば混同されているのと同様に、権威(authority)と権威主義(authoritarianism)が混同されて誤用される場合が多い。権威とは「万人が認めて従わなければならないような価値の力」又は「専門の知識、技術について、その分野で最高の人だと一般に認められている人」のことで、正当性や合理性を備えている。しかし本来「権威主義」は「権威」とは全く異なる概念を所有していて、明確に区別して規定される必要がある。

私は本論文では権威主義を「外在的権威を認め、その正当性の有無、その真偽にかかわらず服従しよう」とし、それを指向し、それを助長する思考様式、および行動様式」と規定しよう。この規定なら社会心理学で

いう権威主義の概念はもちろん、現在一般に使用されている権威主義という言葉のほとんどの意味を抱括し得る。

したがって小論では、権威主義のパーソナリティを、「外在的権威を認め、その正当性の有無、その真偽にかかわらず服従しよう」とし、それを指向し、助長する性向の複合体」と規定する。それは現代社会においては、個人と共同体の矛盾より発生する非合理な情緒から生ずるものである。

社会心理学的な権威主義の研究の先駆と言われる T.W. Adorno 達の共同研究よりなる『The Authoritarian Personality』には、9つの権威主義の性向²⁾が指摘されている。彼らの方法を日本人に適用した城戸 浩太郎は、日本人の権威主義のパーソナリティの特性は、これらの性向に「伝統的価値態度体系」が深く関わっていることを指摘した³⁾。彼の指摘した概念は、『The Authoritarian Personality』で指摘された9つの性向の1つである「Conventionalism」の概念をも抱括している。私は、この典型的なものを、「過度の伝統的価値態度⁴⁾」とし、試みにプリテストおよび本調査に採用した。その結果、これに関係する質問項目に対するリッカート法 (Likert's analysis) による項目分析 (item analysis) では、むしろ「Conventionalism」に関する質問項目よりも高い弁別値 (discriminate power) を示し、他の権威主義の性向と同一次元にあることが確認された⁵⁾。

これらのことから、私は日本人の場合は、『The Authoritarian Personality』で指摘された「Conventionalism」の代わりに「過度の伝統的価値能度」を加えた方が、適切と考える。

これらの9つの性向を要約すると次のとおりである。

- (1) 権威主義的服従性：内集団における道徳的または政治的権威に対して、外形的な服従ではなく、これを抗し難いものと意識し、進んで服従しようとする性向または、無批判的性向。
- (2) 権威主義的攻撃性：内集団における政治的、道徳的権威を侵すものを警戒し、拒絶し、罰しようとする性向。
- (3) 反省内省：自分自身の意識過程や行動の動機などについて、観察したり反省したりしない性向。またはこれらに対する不信と反抗。
- (4) 性：性的行為に対する誇大な関心と過度の禁欲主義的性向。
- (5) 投射性：自己の内部に存在する心理的一面を無意識に他者の中に

投げ込み、それを他者のものと考えようとする性向。ただしこの場合の投射性は、自己の敵意、反感、嫉妬等が投射される場合である。

- (6) ステレオタイプと迷信：一定のカテゴリーについて（例えば民族や集団について）現実認識が単純で固定し、偏見を含んで考える性向。

（個人の）運命が神秘的、超自然的なものによって決定されるという信念。

- (7) 権力と頑強さ：肉体、精神の強さの誇大な主張。支配——服従、強——弱という次元にとらわれる性向。

- (8) 過度の伝統的価値態度：伝統的に受け継がれてきた行動様式に、たとえそれが非合理であっても、何らの疑念も持たず、それに従うことによる満足している態度。

- (9) シニシズムと破壊性：人間性に対するそしり。建設を前提とした破壊性。

3. 権威主義のパーソナリティを測定するものさしの作成

先にあげた9つの権威主義の性向を中心にして、1976年2月～3月にかけて有権者名簿から等間隔サンプリングによる、東京都大田区千鳥町、岡山県真庭郡落合町、全数調査による同勝山町Tを対象とした有効サンプル合計約350名のプリテストを実施した。このプリテストで露呈したいくつかの欠点を改良し、1977年6月～8月、1978年4月～5月に、東京都23区の有権者を対象に本調査を実施した。なおこれらの調査はその性格を考慮に入れて、被調査者に対してはその目的を隠し、「単なる社会意識の調査である」旨を伝えるに留めた。調査および権威主義のパーソナリティを測定するものさしの作成の概要は次のとおりである。

まず調査すべき78地点を23区の人口に比例して各区に配分し、各区において無作為に地点を抽出した。さらに抽出された各地点の有権者名簿から、各々の地点10名ずつ合計780名を抽出した。なお男女の性別と年代構成比は、権威主義のパーソナリティを測定する尺度を作成するに当って重大な社会的属性であるので、東京都のそれにはほぼ一致するように抽出した。したがって抽出は無作為抽出法 (random sampling method) と層化抽出法 (stratified random sampling) の併用で行った。

実際の調査は抽出数 780 名のうち、転居、死亡、該当者なし、病気・高齢のため調査不能 133 名を除く、調査可能なサンプル 677 名に対して行った。回収したもののうち分析に有効なサンプル数は 501 で、実質的な回収率 77.4%。

調査方法は、被調査者が在宅の場合と 60 歳以上のすべての場合は面接法、不在の場合は留置法で、それぞれ 266 名、235 名であった。経験的に 60 歳以上の老人の場合は、留置にすると身体的障害により、質問の意味が十分理解できなかったり、家族の意見に左右されたり、家族が代理で記入したりすることがしばしば起こるからである。

本調査の信頼度 (reliability) は、個人調査のため再調査が不可能なので、他の大規模な調査と同一の社会的属性（性別、年齢、学歴、職業、住宅）および同一の質問項目（支持政党、ナショナリスティックな優越感のスコア〈score〉作成に用いた質問項目）との比較によって検討した⁶⁾。その結果、調査の信頼度は確保されていることが確認できた。

妥当性 (validity) については、まず質問項目作成に当っては、リッカート (Likert) の基準を用いた。次いで選出、作成された質問項目に対して、プリテストの結果、18 の質問項目を採用し、調査した。さらに、これらの質問項目に対してリッカート法による項目分析を行い、弁別値の比較的低いものおよび質問自体が適切でないものを除き⁷⁾、15 の質問項目を採用し、ガットマン法 (Guttman's scale analysis) による再現性係数を検討した。

その結果権威主義のパーソナリティを測定する尺度（今後 A スケールと呼ぶ）作成に採用した 15 の質問項目は次の通りである。ただし、前の理由によって除いた質問項目以外の番号にも Q5, Q10, のようにいくつかの欠如が見られるのは各質問間の相互の影響を少なくするために、この尺度作成に関係のない質問項目を投入したためである。

Q2 政治のことは政治家に任せておくべきで、国民は自分の仕事に専念すべきである。(1. 権威主義的服従性, 2. 反内省)

Q3 現在の若者はあまりにも柔弱に（よわよわしく）なりすぎているので、もっときびしいたんれんと、仕事に対する意欲が必要である。(1. 権威主義的攻撃性, 2. 権力と頑強さ)

Q4 困ったことや苦しいことがあるときは、何も考えないで愉快なことに熱中するのが最もよい。(反内省)

- Q 6 人の一生は生まれたときから、もはや運命によって決められている。(1. ステレオタイプと迷信, 2. 反内省)
- Q 7 人間は生まれつき能力に違いがあるのだから、能力のあるものが能力のないものの上に立つ(支配する)のは当たり前である。(権力と頑強さ)
- Q 8 戦争は人間の本能に深く根ざしたものだから、(たとえ社会制度が変わっても)戦争を世の中からなくすることはできない。(シニシズム)
- Q 9 婦女暴行等のような性犯罪を犯した者は、公衆の面前でのむち打ち、あるいはそれ以上の刑罰を受けるべきである。(性)
- Q11 戦後、義理・人情の念がうすれたという声をよく聞くが、こういう日本古来の道徳を、今後ももり立てていく必要がある。(過度の伝統的価値態度)
- Q12 現在でも、よく職場では新入りのものがお茶をくんだり、上役の雑用を引き受けたりするシキタリがあるようだが、そういうことはだれかがやらなければならないのだから、新入りがやるのが当然である。(1. 過度の伝統的価値態度, 2. 反内省, 3. 権威主義的服従性)
- Q13 国の発展のためには、少数の人々が犠牲になることは、現実としてはやむを得ない。(権威主義的服従性)
- Q14 両親に対して、愛情と感謝と尊敬の念を感じることのない人間は最も劣等な人間である。(1. 権威主義的攻撃性, 2. 権力と頑強さ)
- Q16 どんなに科学が進歩しても、手相や占いもばかにできない。
(1. 迷信とステレオタイプ, 2. 反内省)
- Q17 もし顔に泥をぬられた(名譽が傷つけられた)場合には、あくまでも汚名をそそがなければならない。(1. 権力と頑強さ)
- Q18 人を見たら泥棒と思え、ということばがあるとおり、私どものまわりには危険なものがあふれているので、少しの油断もできない。(1. 投射性, 2. シニシズム, 3. ステレオタイプ)
- Q19 若い独身の女性が、何人かの男性と肉体関係を持つのは犯罪的である。(性)
- 弁別値 φ は、 $\varphi > 12.4$ (危険率0.05, n=248) であればその項目は全体に対して相関があり、採用可能である。Aスケール作成に用いた質問

表 1-1 Aスケール作成に用いた質問項目の弁別値

Q 2	49.8	Q 7	46.8	Q12	52.5	Q17	39.9
Q 3	45.2	Q 8	38.7	Q13	43.0	Q18	43.1
Q 4	67.3	Q 9	49.3	Q14	44.1	Q19	40.3
Q 6	47.6	Q11	44.2	Q16	31.0		

項目の弁別値は、いずれも $\varphi > 35$ の高い数値を示していた。(表1-1)

この15項目に関するガットマン法による再現性係数^⑧は、0.78と数字上はさほど高い数値を示さなかった。しかし、調査対象、質問内容が広範囲に渡っている上、これまでの世論調査でもしばしば指摘されてきたように、日本人は、欧米諸国の国民に比較して内の一貫性が乏しく、高度な社会事象に対する判断を要する問題には態度不明者が多いと言われていること、また事実0.90という高い数値を得た例は、この種の調査においてはほとんど見当らないこと、これら的事情を考慮に入れるに、0.78というのは、それほど低い数値とは言えない。

先にあげた権威主義のパーソナリティに関する15項目の質問に対して、被調査者に「大いに賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらとも言えない」、「どちらかといえば反対」、「大いに反対」という5段階的回答カテゴリーのいずれかによって回答させたものに、それぞれ4点、2点、0点、-2点、-4点の得点を落とし^⑨、その合計点をもって権威主義の態度スコア(Aスコア)とした。

ただし、このものさしは今後さらに改良され得るであろうし、最終的なものではない。

4. 日本人の権威主義のパーソナリティと 社会的属性等の関係について

(a) 男・女の権威主義のパーソナリティ

男・女のA平均スコアは、表1-2に示したとおり、男性4.9、女性7.3と明確な、有意差とは言えないが、権威主義のパーソナリティは女性が男性より強い傾向にあると言えよう。

しかし男女の権威主義のパーソナ

表 1-2 男・女のAスコア

	男 性	女 性
A平均スコア	4.9	7.3
n	249	249
S. D	15.5	15.3

リティに関しては、その平均得点の差そのものよりも、むしろ、男性と女性それぞれにとっての権威の対象の差や権威の構造の差が注目される。

フリードリッヒ (C. J. Freidrich) は、「権威の発生は価値が変わる結果であり、権威の崩壊は価値が消滅する結果である。」(C. J. Freidrich, 1976, p. 70~71) と言う。個人の権威と大きな関わりある価値観が異なれば、おのずと権威の対象も異なると考えられる。

本調査では個人の身分・地位に対する価値観の差を測定するために、「個人の身分や地位の高低を決定すると考えられるものを職業、学歴、家柄、有名、財産、収入、その他の中から特に2つ選択せよ」という旨の質問をした。その結果男性は、①職業、②その他、③財産、④家柄、⑤収入、⑥学歴、⑦有名の順で、一方、女性は①家柄、②職業、③学歴、④財産、⑤その他、⑥有名、⑦収入の順で、男性では四位の家柄、六位の学歴が、女性では一位、三位と上位を占めていた¹⁰⁾。このように男性と女性の間には身分・地位に対する価値観に大きな差がある以上、権威の対象も異なると考えられる。

さらにこのことは、「権威主義的服従性」ひとつ検討しても明らかになろう。

日本では現在でも、男女の家族的な役割については、小学校の P T A 等には傾向がよく現われているように、主たる経済的責任は男性が受け持ち、家庭内の仕事や育児に関しては女性が受け持つという形態が多く見られる。近年は確かに職業を持った女性も増加しており、経済的責任を女性が担っているケースも多く、「キャリア・ウーマン」などのことばが流行している。しかし、逆に言えばこのことばが流行していること自体、女性の経済的自立がいまだ目新しさを持っていることがある程度裏付けているのではないかとも考えられる。

また女の子を持った親たちから、「女の子はどうせ結婚して家庭に入るのだから、男の子ほど勉強しなくてよい。」という言葉をしばしば耳にする。いまだ、男性は家庭外の社会と接触し、社会的・経済的責任を担う者で、女性は家庭内を守るというような風潮が残っているように思われる。

そのことによって女性は対社会的・経済的に男性に対して服従的になり、それは、一般的な事象にまで拡大することも考えられる。そして、

既婚の女性の対社会的な行動は、彼女にとっての権威である男性の価値観が許容する範囲で行われる場合が多くなる。

一見すると、女性は、男性よりも権威主義的服従性が強いように思われる。しかし、男性も、職場や交友関係等において、彼なりにまた別の形態あるいは類似の形態で権威主義的服従を強いられている場合も多いので、女性の方が「権威主義的服従性」が強いとは必ずしも言い切れない。

本調査においても、Q2政治のことは政治家にまかせておくべきで……と、Q13、国の発展のためには、少数の人々が犠牲になることは……は、ともに「権威主義的服従性」に関する質問項目であるが、質問別A平均スコアにおいて、Q2は女性の方が有意に高く、逆にQ13は有意差はないものの数字上は男性の方が高くなっていた。(表1-3)このように、「権威主義的服従性」ひとつ検討しても、男性と女性の権威の対象に著しい差があることがわかる。

表1-3 男性と女性の質問別A平均スコア

	男 性		有 意 差	女 性	
	A平均スコア	S.D		A平均スコア	S.D
Q2	-1.57	2.57	*	-0.77	2.76
Q6	-1.37	2.69	*	-0.67	2.57
Q8	-0.94	2.85	*	-1.66	2.44
Q9	0.70	2.83	*	1.67	2.44
Q13	-0.77	2.66		-1.14	2.46
Q19	0.17	2.41		0.41	2.56

*は有意差あり(危険率0.01以下)。

男性と女性の権威の対象に著しい差がある以上、どちらにどの性向が強いとは一概には言えないが、「性」に関しては比較的明瞭な傾向が現われている。

Q9、婦女暴行等のような性犯罪を犯した者は……、Q19、若い独身の女性が何人かの男性と……はともに性行為に対する誇大な関心と過度の禁欲主義的性向に関する質問項目であるが、前者はどちらかというと女性が被害者の立場に立った質問で、女性の側に陽反応が多いのも当然である。ところがQ19は理論的にはQ9と相殺を期待できる質問で、男性よりも陰反応が多いはずであるが、結果は逆に近いものであった。(表

1-3) 「性」に関する傾向は、男性に比較して女性の方が強いと言える。これについて私は次のように考える。

戦前のような権威主義社会においては、天皇に対する国民の忠誠、親に対する子の孝行が美德とされたように、女性の貞操もまた必要以上に価値が付与された。身分や地位の観念が強く残っている男性優位の社会では、男性は彼自身がどれほど社会的に高い地位や身分を獲得するかが関心となるのに対し、女性はどれほど社会的に高い地位や身分のある男性を配偶者にするか、あるいは結婚後は配偶者である男性の地位や身分がどれほど上昇するか、あるいは上昇させるかが関心となる。「内助の功」ということばもある。現在でも女性は、彼女自身で社会的地位や身分を獲得することによってではなく、配偶者、あるいは婚前においては家に付随している社会的な地位や身分によって、彼女の地位や身分が決定される傾向が強いからである。

そのため女性の価値は、どれほど男性が希望する条件を備えているかによって決定されがちになる。女性にとって容姿の端麗さが男性に比較して重要性を持っていること等は、これを如実に物語るものである。戦前の権威主義社会においては、性に関する純潔が男性の希望する条件の一つとなつたため、特に女性の性に対する禁忌の意識が強くなったと考える。

このような近代以降の日本の女性の成長過程において、性に対する強い禁忌の意識が性行為に対する過度の禁欲主義的傾向を生んだと考える。

(b) 年齢と権威主義のパーソナリティ

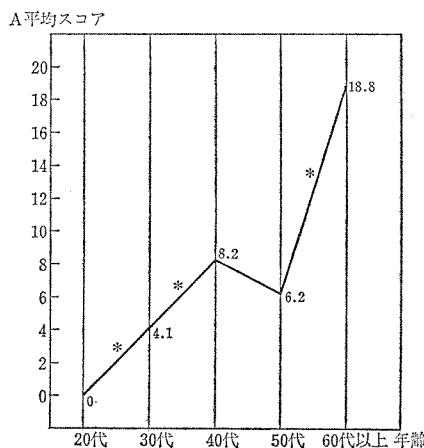
人間は高年齢になるにつれて、おのずと思考能力が低下し、限られた範疇で物事を考えるようになり、伝統依存、伝統指向の傾向が生じ、社会的価値が逆流しない限り、権威主義のパーソナリティは強化され易い。現在の日本の場合、高年齢者はそのうえ、権威主義的な環境で成長しているので若年齢者よりも権威主義のパーソナリティが強力であることは調査以前の仮説として提起される。

結果はグラフ1-1の示すとおり、50代を除いて高年齢になるほどA平均スコアは高くなつて、 $A\text{平均スコア} = 0.41 \times \text{年齢} - 8.2$ (年齢 ≥ 20) の関係にあり、全体的には高年齢になるほど権威主義のパーソナリティ

表 1-4 年代別A平均スコア

強度			20代	30代	40代	50代	60代以上	平均
5	強　い	6.6% 前後	24以上	28以上	31以上	29以上	43以上	30以上
4	やや強い	24.2% 前後	9~23	11~27	16~30	15~28	25~42	15~29
3	普通	38.3% 前後	8~8	8~10	2~15	2~14	12~24	2~14
2	やや弱い	24.2% 前後	-21~9	-14~4	-12~1	-19~3	-4~11	-16~-3
1	弱　い	6.6% 前後	-22以下	-15以下	-13以下	-20以下	-5以下	-17以下

グラフ 1-1 年代とA平均スコア



*は有意差あり(危険率0.03以下)。

表 1-5 年代とA平均スコア

	20代	30代	40代	50代	60代以上
A平均スコア	0	4.1	8.2	6.2	18.8
n	149	116	95	63	75
S.D	14.3	13.5	15.0	14.3	14.5

は強いと言える。

50代は折れ線グラフの窪地を形成し、有意差ではないが、A平均スコアは40代よりも低くなっている。今回の調査に限って、このような結果になった可能性も十分考えられるが、これについての理由は現在のところ推測の域を出ないので、ここでは触れない。

20代、40代、60代以上を比較して、高年齢になるにつれてA平均スコアが明らかに高得点を示している質問項目は、Q3、現在の若者はあまりにも柔弱に（弱々しく）なりすぎているので……（1. 権威主義的攻撃性、2. 権力と頑強さ）、Q11、戦後、義理・人情の念がうすれたという声をよく聞くが……（過度の伝統的価値態度）、Q14、両親に対して、愛情と感謝と尊敬の……（1. 権威主義的攻撃性、2. 権力と頑強さ）、Q19、若い独身の女性が、何人かの男性と……（1. 性、2. 過度の伝統的価値態度）で、いずれも、「権威主義的攻撃性」または「過度の伝統的価値態度」にかかるものである（表1-6）。今回の調査結果からは現在の日本人の場合、高年齢になるにつれて特に、「権威主義的攻撃性」と「過度の伝統的価値態度」が強力になっていると言える。

表1-6 20代、40代、60代以上の質問別A平均スコア

	20代		有意差	40代		有意差	60代以上	
	A平均 スコア	S.D.		A平均 スコア	S.D.		A平均 スコア	S.D.
Q3	1.58	2.30	*	2.57	1.87	*	3.33	1.44
Q11	1.96	1.69	*	2.63	1.91	*	3.47	1.32
Q14	1.26	2.41	*	2.19	2.03	*	3.00	2.03
Q19	-0.72	1.97	*	0.53	2.62	*	1.73	2.66

*は有意差あり（危険率0.01以下）。

（c）学歴と権威主義のパーソナリティ

学歴と権威主義のパーソナリティの関係については、本来ならば質的な観点と量的な観点をからめて取り扱う必要があるが、ここでは資料の関係から、主として量的な観点から検討を加えていく。

低・中学歴のみならず、高学歴においても、権威主義的教育がなされる場合には、量的に学歴を重ねても、権威主義のパーソナリティは必ずしも弱くならないのであるが、社会的価値観が権威主義的なものを否定する方向へ向かっている社会においては、高等教育を受けることによって反内省的な性向を初めとする非合理的な情緒に対する抵抗力が養われるので、高学歴になるに従って権威主義のパーソナリティは弱くなると考えられる。また現代日本のような学歴社会においては、学歴によって職業が大きく限定される傾向にあり、低学歴者は権威主義的服従を強要される職業に就きがちであるので、低学歴者は高学歴者よりも、権威主義

表 1-7 学歴とA平均スコア

	低学歴	中学歴	高学歴
A 平均スコア	13.4	5.0	0.7
n	138	215	140
S.D	15.5	14.5	14.2

低学歴：学歴なし、小学校、尋常高等小学校、新制中学、卒

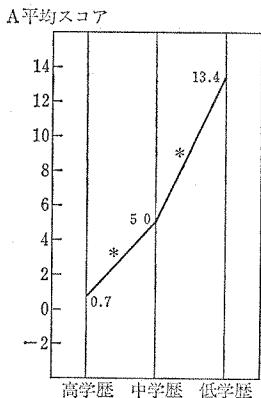
中学歴：旧制中学、新制高校、旧青年学校、卒

高学歴：旧制高等専門学校、新制大学、旧制大学、短期大学、新制高等専門学校、卒 四年制大学在学者

のパーソナリティは強いと考えられる。

なるほど、本調査においては学歴を表1-7のように分類すると、低学

グラフ 1-2 学歴とA
平均スコア



*は有意差あり(危険率0.03)

歴になるほど権威主義のパーソナリティが強くなっている(グラフ 1-2)。

しかし、この分類方法は大きな問題をかかえている。低学歴になるほど高年齢者の、高学歴になるほど若年齢者の占有率が増大するということである。

前述の「年齢と権威主義のパーソナリティ」から、当然の帰結として高年齢の占有率が増大するほど、権威主義のパーソナリティは強くなり、若年齢者の占有率が増大するほど弱くなることが予測される。それではこの結果が純粋に学歴による相関なのか、あるいは年齢に影響された擬似相関なのか区別がつきにくい。

そこで年齢からの影響を排除したエラボレーション(elaboration)を試みた。

グラフ 1-3 の示すとおり、A平均スコアはいずれの年代においても、低学歴は、中学歴、高学歴より高得点を示している。ただし年代別に細分したために、サンプル数不足が生じ、有意差がない年代もある。中学歴と高学歴を比較すると、20代、30代、すなわち新制卒では中学歴の方が明らかに高得点を示しているが、他の年代では決定的な差はない。

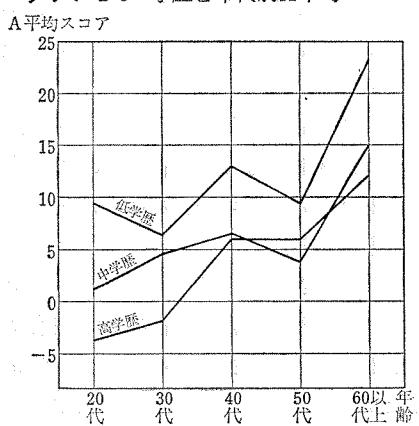
新制においては、低学歴になるに従って権威主義のパーソナリティは強くなっているが、旧制においては、中学歴と高学歴の間に権威主義の

表 1-8 学歴と年代別A平均スコア

	旧 制			新 制		
	低学歴	中学歴	高学歴	低学歴	中学歴	高学歴
A 平 均 ス コ ア	17.4	6.6	10.6	8.7	4.4	- 1.4
n	74	61	24	64	154	116
S.D	16.4	15.3	13.2	13.0	14.1	13.5

パーソナリティに強度の差は見られない。これについて私は、権威主義社会における高学歴という特性によると考えている。

グラフ 1-3 学歴と年代別A平均スコア



によって権威主義のパーソナリティの強度に大差が現われる。

専門職は、高度な知識、資格、経験を持って行う典型的な頭脳労働者であるため、高学歴者が圧倒的に多く、現代資本主義下では、思考様式

(d) 職業と権威主義のパーソナリティ

現代では、職業と権威主義のパーソナリティの関係は、服従する側——労働者、家庭婦人、服従させる側——経営者、服従する側でも服従させる側でもない——無職等、の単純な三集団に分類して論ずることはできない。そこで表1-9のように分類した。

同じ労働者でも、労働内容

表 1-9 職業とA平均スコア(I)

	労 働 者				自 営 業	経営者・管理職	
	販売・サービス・一般作業職	技能職 熟練職	事務職 技術職	専門職		小企業主	中企業
A平均スコア	1.2	9.1	2.1	- 7.3	10.7	6.6	- 1.5
n	58	65	59	29	55	20	11
S.D	12.2	14.7	15.8	14.3	14.4	12.0	10.5

小企業：従業者1人以上30人未満

中企業：従業者30人以上1000人未満

大企業：従業者1000人以上

表 1-9 職業と A 平均スコア(II)

	内職・パート ・アルバイト	家庭婦人 (主婦)	学 生	無 職	分類不能 ・その他
A 平均スコア	7.2	8.0	- 3.8	17.1	14.4
n	26	116	16	38	5
S. D.	13.8	15.0	11.4	16.5	11.2

の合理性が最も要求される職業である。また、合理的でなくては遂行できない職業である。これに対して技能職・熟練職は、高度な学識を必要とせず、大工、左官、工員等、伝統的職業が多く、いまだ頭領・弟子、義理・人情、先輩・後輩の強調等、旧来の家族的擬制——非合理な思考様式が残っている職業が多い。このような理由により労働者の中では専門職の権威主義のパーソナリティが最も弱く、技能職・熟練職が最も強いと考える(表1-9(I))。

経営者・管理職についても大企業・官公庁や企業、自営業、小企業主の間に相違がある。現代資本主義下においての企業・団体の運営は、より家族レベルに近いものについては、旧来の家族的擬制——非合理な人間関係、主従関係——が強力に残存していても、家族的雰囲気が潤滑油となり、可能であるが、大企業、大団体になるにつれて、それでは矛盾が生じる。また、自営業者、小企業主は、投票行動からも明らかのように思考様式も保守的で過去にいわゆる「下積み」の経験のある人々が多く、権力に対して指向し、服従的態度が強いように思われる。企業、団体の規模が小さくなるほど、経営者、管理職の権威主義のパーソナリティは強力になっている(表1-9(I))。

定職に就いていない人(家庭婦人、学生、無職、パート・アルバイト・内職、無職)については、学生は、すべて高学歴の大学生で、明らかに若年齢であり、無職は、すでに定年退職した高年齢層の占有率が圧倒的に大きい。したがって、これらの中では、学生の権威主義のパーソナリティは弱く、無職が極度に強いのも当然である(表1-9(II))。

サンプル数の不足により断定し難い場合も含まれるが、権威主義のパーソナリティの強い職業は、全体では無職、自営業・小企業主、技能職・熟練職の順で、逆に弱い職業は、専門職、学生、大企業・官公庁の経営者・管理職の順になっている。

次に労働者を、所属する企業、団体の規模によって、経営者・管理職と同様に、大・中・小に分類すると、労働者についても、大企業、大団

表 1-10 職業とA平均スコア

	労 働 者		
	小 企 業	中 企 業	大 企 業
A 平 均 ス コ ア	4.0	5.3	- 1.3
n	73	71	67
S.D	14.5	14.1	16.4

体に勤める人よりも、小企業、小団体に勤める人の方が権威主義のパーソナリティが強くなっている。日本人の場合は、どちらかというと経済的に、生活の不安定な人々の方が、権威主義のパーソナリティが強いのである（表1-10）。

現代日本の場合、権威主義のパーソナリティは、旧来の家族制度的擬制が残存している職業ほど、経営者、労働者を問わず強力になっている。

(e) 支持政党と権威主義のパーソナリティ

支持政党別のA平均スコアは表1-11に示すとおり、支持政党なし層3.1、社・共支持層3.6、中道四党支持層¹¹⁾3.8、自民党支持層12.6であった。

表 1-11 支持政党とA平均スコア

	自 民	社・共	中道四党	支持政党なし
A 平 均 ス コ ア	12.6	3.6	3.8	3.1
n	155	67	94	171
S.D	13.4	17.1	14.1	15.2

野党間では、どの政党支持層が権威主義のパーソナリティが強いとも言えないが、自民党支持層は野党支持層に比較して断然強い。

この結果について、自民党支持層の権威主義のパーソナリティが強いことは、支持層の社会的属性からも推測可能であるが、権威主義の性向との関係から、調査以前の段階でも次のような仮説から、予測され得た。

権威主義のパーソナリティの強い個人は、権威主義的服従性により、彼自身の行動の決定が、彼にとっての権威に依存的になり、彼は、眞の

意味で彼の意志や行動がもてないような自律性の欠如した状態に陥っている場合が多い。彼は、彼にとっての権威の笠の外にあるときも、一般的な行動様式や思考様式において、伝統や習慣等の既成のものに依存する傾向が強い（「過度の伝統的価値態度」）。また独自の行動をとるよりも、大多数の人の行動に同調しようとして、それによって、彼個人が大勢から孤立する不安から逃れ、その行動が惹起する結果についての責任を回避し得る。彼は一般から逸脱しない行動をとること、既成の行動様式、思考様式を遵守することに専念し、その行動自体の良否や、彼自身の行動の動機について、深く考察しようとする態度が失われがちになる（反内省）。

このような、「権威主義的服従性」や、「反内省」「過度の伝統的価値態度」などの性向の故に、権威主義のパーソナリティの強い個人は、彼にとっての権威が明確な態度を示さない場合は、政党を支持するに際しても、少数政党支持者として孤立することへの半ば潜在化した不安、したがって、大勢の支持者を持つ大政党支持者として安住したいという願望を抱いていると考えられる。またこれらの性向の故に現体制の良否について深刻に考察することを拒否する傾向が生じる。

このため、彼にとっての権威からの影響がない場合には、政党を支持する場合、少数政党や革新政党は回避し、現体制維持の大政党を支持するであろうことが予測される。

また権威主義のパーソナリティの強い個人は、自律性の欠如の故に、伝統、習慣、道徳等、既成の行動様式や思考様式をよりどころとし固執しているので、それを侵そうとする革新的な行動に対して不安や嫌悪を抱き、これに対して攻撃的な傾向が強い（「権威主義的攻撃性」）。したがって急激な革新政党に対しては、不安や敵意が生じ接近し難い。このような急激な革新政党に対する攻撃性が余計に、保守的な政権政党への執着を強化しているとも考えられる。

このような理由から、自民党支持層に権威主義のパーソナリティの強い人が多いと考えられた。

しかし自民党支持者すべてが、権威主義のパーソナリティが強いとは限らない。A平均スコアの最も低い人から順に全体の30.8%（A平均スコアが-3点以下）を抽出し、その中に含まれる自民党支持者をすべて抽出した。該当する自民党支持層は17人（自民党支持者の9%）で、サンプ

ル数は少ないが分析すると、彼らの特徴は、比較的若い年齢で、逆境においても物事を深刻に考え、自民党を支持することについても彼らなりに理論的な理由を持っている人、すなわち「反内省」的性向や「過度の伝統的価値態度」から脱却している人たちである。

社・共を中心とする革新政党支持者はどうであろうか。

政治意識の形成要因としては、幼児期における経験はほとんど問題にされない。「政治的事象は、広義の社会的事象のなかでも、難解なものであるからである。したがって、政治的事象が理解でき、さらにそれに関心を抱く時期は、成人語が理解できるようになった以後ということになる。……（中略）……政治的関心を持ちはじめる時期は、中学生から高校生にかけてが、もっとも多く、政治的関心をもっている者の90%が、この時期に集中している。そして、高校卒業後に政治的関心をもちはじめる者は、ごくわずかしかないし、小学生の時期に関心をもちはじめるものは、より少ない。また、男にくらべ女の方がやや関心をもちはじめる時期がおくれるという傾向がみられる。」〔上條末夫、1978 p.23~24〕一方、権威主義のパーソナリティは幼時期より形成され始め、この時期に形成されたものが最も重要なウェイトを占める。権威主義のパーソナリティは、政治意識が形成される時期より早い時期に形成される。そのため個人が政治意識をもち始める時期には、彼の権威主義のパーソナリティのある程度の輪郭はすでに形成されている。そのため権威主義のパーソナリティと政治イデオロギーの不均衡が生じる。

また日本の場合、社・共支持層にも、確たる政治イデオロギーを所有せず、単に人間関係のみにより支持している人々も多数含まれる。S.Dが17.1と最も高いのもそのためであろう。

したがって、必ずしも、革新性が強いといわれている政党支持者ほど、権威主義のパーソナリティは弱くなるとは言えないのである（表1-11）。

次に大都市では「第一党」に上昇した「支持政党なし」層について検討しよう。私は支持政党なし層を、政治というものを自分以外の誰かの仕事だと考え、政治に参加しないにもかかわらず不安を感じない「無関心派」と、政治には関心を持っているが、既成の政党に物足りなさを感じたり、絶望感を抱いている「関心派」に大別した。

本調査では、両者をQ2、「政治のことは政治家にまかせておくべきで、国民は自分の仕事に専念すべきである。」という意見に対して陽反

表 1-12 支持政党なし層における「関心派」、「無関心派」のA平均スコア

	無 関 心 派	関 心 派
A 平 均 ス コ ア	13.9	- 1.6
n	37	109
S.D	12.8	14.1

応を示した人を「無関心派」、陰反応を示した人を「関心派」とした。

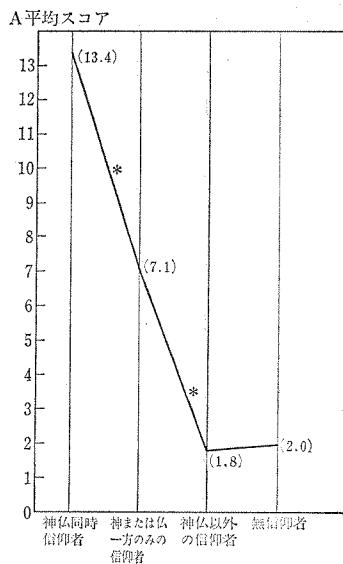
「無関心派」のA平均スコアは13.9と高く(自民党支持層より高い)、逆に「関心派」は-1.6と低かった(表1-12)。問題自体に含まれていた差5.6を差し引いても実質的な差は9.9あり、明らかな有意差と言える。「無関心派」のS.Dが12.8と低いことも注目される。

(f) 信仰の権威主義のパーソナリティ

本調査において、『1.神、2.仏、3.奇跡、4.易や占い、5.お札やお守りの力、6.何も信じていない』の中から信じているものを選択する(複数も可)』質問に対して、第1に、神と仏を同時に信仰している人々——「神仏同時信仰者」グループ、第2に「神または仏の一方のみの信仰者」グループ、第3に神または仏は信じていないが、奇跡、易や占い、お札やお守りの力等のうち、一つ以上信じている人々——「神仏以外の信仰者」グループ、第4に何も信じていない——「無信仰者」グループの4グループに分類した。A平均スコアは、「神仏同時信仰者」が13.4と断然高く、「神または仏の一方のみの信仰者」グループが7.1、以下順に1.8、2.0であった(グラフ1-4)。

「神仏同時信仰者」の社会的属性の特色は、男性対女性の構成比は、ほぼ2対3で、女性の方が多く、60歳以上が3分の1近くを占め、自民党支持者が過半数を占有していることである(表1-14, 15, 16)。

グラフ 1-4 信仰とA平均スコア



*は有意差あり。

表 1-13 信仰とA平均スコア

	神仏同時 信 仰 者	神または仏一 方のみの信 仰 者	神仏以外の 信 仰 者	無 信 仰 者
平均Aスコア	13.4	7.1	1.8	2.0
n	118	142	80	141
S. D.	15.5	14.4	13.7	18.2

表 1-14 「神仏同時信仰者」と性別

(単位: %)

男 性	女 性	計
41.5	58.5	100.0 (118)

表 1-15 「神仏同時信仰者」と年齢

(単位: %)

20 代	30 代	40 代	50 代	60代以上	計(基数)
15.3	18.6	21.2	14.4	30.5	100.0(118)

表 1-16 「神仏同時信仰者」と支持政党

(単位: %)

自 民	社・共	中道四党	支持政党なし	その他DK	計(基数)
50.8	9.3	10.2	26.3	3.4	100.0(118)

「神仏同時信仰者」と母集団との各質問についてのA平均スコアの平均値の差を検定した。その結果A平均スコアはすべての質問について、「神仏同時信仰者」が母集団よりも大きく、15項目中10項目に有意差が見られた(表1-17)。

表 1-17 「神仏同時信仰者」と母集団のA平均スコアの差の検定

順 位	Q	t	危 險 率	順 位	Q	t	危 險 率
1	Q 2	3.94		11	Q 4	1.47	0.05以上
2	Q19	3.24		12	Q 9	1.14	
3	Q12	2.93		13	Q17	1.21	
4	Q16	2.60		14	Q18	0.73	
5	Q 7	2.59	0.01以下	15	Q 8	0.07	
6	Q11	2.45					
7	Q14	2.20					
8	Q 3	2.16					
9	Q13	2.04					
10	Q 6	1.99	0.05未満				

$$t = \frac{\bar{x}_1 - \bar{x}_2}{\sqrt{n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2}} \sqrt{\frac{n_1 n_2 (n_1 + n_2 - 2)}{n_1 + n_2}}$$

またQ2, 政治のことは政治家にまかせておくべきで……, Q19, 若い独身の女性が、何人かの男性と……, Q12, 現在でもよく職場では新入りの者が……, Q16, どんなに科学が進歩しても、手相や占いも……等、「権威主義的服従性」、「反内省」、「迷信とステレオタイプ」等、正当性の有無、真偽に関わらず権威に服従する心理構造から生じる権威主義的性向が上位を占めていた。

(g) 身分・地位に関する価値観と権威主義のパーソナリティ

権威の変化は社会的価値の変化、もしくは消滅による。資本主義社会では、個人の業績の程度が価値とされるであろうし、社会主义では集団達成への寄与が価値とされる。ここでは権威主義と深い関わりのある身分・地位に対する民衆の価値観を取り上げ、現在の社会的権威の様相を探る手がかりとした。

明治から終戦にかけては、権威主義的な序列を基調とした社会秩序と調和が極度に重んじられ、天皇に忠、親に孝といった一方的服従と国家を個人に優先する全体主義的傾向が存在した。個人の自由や意志は軽視されがちであった。個人的な利益を追求するよりは、自己を棄てて、国のために、天皇のために献身的に奉仕することが美化され、それに価値が付与された。それは物質よりも精神を偏重する精神主義的な道徳につながっていたと考えられる。

ところが終戦とともに、それまでの序列は一応撤廃され、たてまえとして平等が唱えられるに至った。それまでのようないくつかの権威主義的な序列に基づく全体主義は崩壊し、万人が平等な立場から、個人の自由や意志を主張することが可能になった。この民主主義は民衆の中からわき上がったものではなく、進駐軍の指導のもとにその原形が形づくられ、権威主義のパーソナリティの強い人々も、それ故に追従した。

「財産」や「収入」の経済的利益を優先的な価値とする考え方には、戦前の全体主義的、精神主義的道徳からすれば個人の利益を追求する要素が強いので、否定的になる。したがって、戦前のような権威主義的な道徳観念を保持している人は、「財産」、「収入」などの経済的利益よりも、権威主義的序列の基盤となっていた「家柄」に価値を感じる。また、このような非現代的価値観とは異なって、個人主義的、資本主義的な価値観を所有している人ならば「家柄」よりも「財産」、「収入」に価値を感じる。

じる。しかし逆に「財産」、「収入」により価値を感じている人が必ずしも権威主義のパーソナリティが弱いとは言えない。元来、価値は権威の変化もしくは消滅によって変化するのである。権威主義的な道徳を所有した人が、経済力が権威となりつつある今日、彼の権威主義的な指向を経済的利益追求の方向へ傾けている場合もあるからである。

「日本の大学制度は、当初から、国が必要とする人材の供給を主たる目的として、国家の手で創設された。」(R. P. Dore, 松井弘道訳, 1973, p. 53) 大学すなわち全体主義的な社会に寄与する人材の育成の場とも考えられていた。それはまた「頭がよくて貧しい児童であれば——そしてお上の面接者が『中堅層の家庭』と認めるような正直、勤勉な家系の出身であれば——教師に勧められて師範学校や、陸士・海兵の入学試験を受け、中流階級の仲間入りをする二つの最も安上がりな道のどちらか、つまり教員か軍人を志すという進路もあった」(同, p. 60) ように、学歴は社会的階梯の上昇ルートの一手段でもあった。学歴は人間の身分・地位をふりわけ、序列を決定し、学歴の程度は個人の威信と価値を決定する補助的役割を果たしていた。

現代においても、学歴は個人の職業決定に重要な役割を果たし、光背効果をもたらしている。

したがって権威主義のパーソナリティが強い個人は身分・地位の上下という観念に捕われる性向が強いので(「権力と頑強さ」), 彼の序列を決定する重要な要素である学歴に対してより関心を示しがちになるのである。

「職業」に関しては、戦前は、個人よりも国家が優先したために、事業家よりも官吏が重視された。また国家への奉仕を意味する軍事や統治が最も栄誉ある職業とみなされていたために、軍人や政治家は民衆の憧憬の的であり最も威信が高かった¹²⁾。未解放部落ひとつ取り上げても明らかのように、神聖な職業や賤しい職業という観念も強く、職種によって人間を差別する傾向が存在していた。職業は、身分・地位と連携するものであると考える傾向が強かった。

現代においても、このような傾向は残っているが、職業を経済的利益獲得の手段と考える傾向も強くなっている。民衆の憧憬の的となる職業は、一般の人々から尊敬を受ける名誉ある職業というよりは、より高収入を安定してもたらす職業へ移行しつつある。

「職業」に対する価値観の中には、非現代的要素と資本主義的要素が共存している。

東京都23区を対象とした調査においての身分・地位に関する価値観についての質問は、『個人の身分・地位の高低を決定すると考えられるものを、「職業」、「学歴」、「家柄」、「有名」、「財産」、「収入」、「その他」、の中から特に2つ選択させる』というものであった。

しかしサンプル数を考慮して、二者を選択させることにより、かえって核となるべき権威主義のパーソナリティとの関連を曖昧にし、結果的にはマイナスの効果を生じてしまった。

これらを次の3グループに分類した。

第1のグループは、「家柄」、「学歴」、「有名」、「その他」のうち、二者を選択した人々のグループであり、非現代的価値観を所有しているグループであるとした。

第2のグループは、「財産」、「収入」、「職業」、「その他」のうち二者を選択したグループであり、比較的資本主義的な価値観を所有しているグループであるとした。

第3のグループは、「家柄」、「学歴」、「有名」のうち1つと、「財産」、「収入」、「職業」のうち1つを組み合わせて選択したグループで、第1のグループと第2の中間的な存在であり、両グループの価値観を合わせ持っているとした。

これらの3グループのA平均スコアを比較すると、「非現代的価値観グループ」は12.9、第3の「中間的価値観グループ」は6.8、資本主義的価値観グループは2.2で、「非現代的価値観グループ」から「資本主義的価値観グループ」へ移行するに従って、徐々に低くなっていた。（グラフ1-5）

また、単独でA平均スコアの比較的高得点を示したのは、「学歴」、

表 1-18 身分・地位に関する価値観とA平均スコア

	職業	学歴	収入	家柄	有名	財産	その他	D K
A平均スコア	4.8	10.7	7.8	9.5	7.9	2.8	4.1	2.4
n	197	130	65	167	66	127	89	37
S.D	15.6	14.6	16.1	15.4	15.9	14.5	15.5	14.4

「家柄」と回答したグループで、それぞれ 10.7, 9.5 であった。逆に最も低得点を示したのは、「財産」と回答したグループで 2.8 であった（表1-18）。

(h) ナショナリスティックな優越感と権威主義のパーソナリティ

権威主義のパーソナリティの強力な人の中には、支持政党なし層の「無関心派」のように、反内省的性向のため、政治的事象や国家レベルの事象に関しては無関心な人も含まれている。ところが、愛国心は、国民が「我らの国家」という意識を持って初めて高揚を見せるのである。政治的事象や国家レベルの事象に全く無関心な人に真の愛国心が存在するとは考えられない。ま

たナショナリズムは国際的な情勢に対応して現われる¹³⁾。このため現在の日本においては理論的には、ナショナリズムの一構成要素であるナショナリスティックな優越感も権威主義のパーソナリティと全く同一軸上にあるとは考えられないのである。

本調査においてはナショナリスティックな優越感に関する、

Q5, 日本は一流国である。

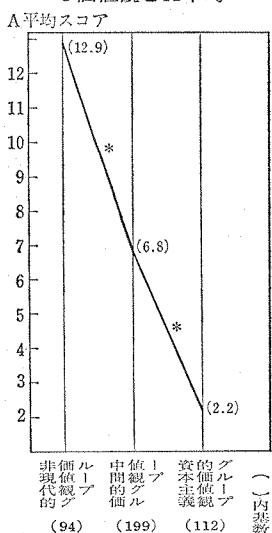
Q10, 日本は今でも外国から見習うことが多い。

Q24, 日本人は他の国民と比べてすぐれた素質をもっている。

の各質問に対して、Q5, Q24には陽反応、Q10に対しては、陰反応に1点を落とし、これらの合計点をNスコアとし、Nスコアの高得点者ほど、ナショナリスティックな優越感が強いとした。これらのナショナリスティックな優越感に関する質問および得点の出し方は、1973年6月のNHK世論調査とほぼ同一である。

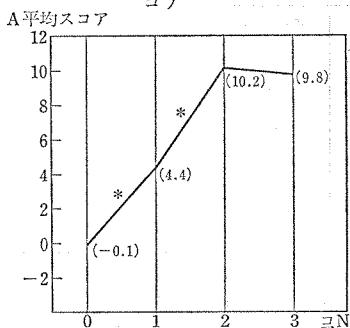
A平均スコアは、Nスコアの0点グループが最も低く、1点、2点とNスコアが高得点になるにつれて高くなり、2点から3点の間は横ばい状態になっている（グラフ1-6）。全体的には、ナショナリスティックな優越感が強い人の方が弱い人よりも権威主義のパーソナリティが強いと

グラフ 1-5 身分・地位に関する価値観とA平均スコア



*は有意差あり。

グラフ 1-6 Nスコア×A平均スコア



*は有意差あり

言える。

Nスコアの3点グループと2点グループの間に、A平均スコアの差が見られないのは、前にあげた理由の他に、Nスコアの質問がスケーラブル(scalable)でないこと、それに現在日本人のナショナリスティックな優越感は、権威主義のパーソナリティほどは、その非説得性、非合理性が強力でないということに起因すると考える。

今回の調査におけるナショナリスティックな優越感の強弱は、男女間には全く差はなく(表1-20)、年齢については、20代は他の年代に比較して弱いが、他の年代間には有意差がなく(表1-21)、学歴については、旧制、新制双方についても、低学歴、中学歴、高学歴間に有意差はなく(表1-22、1-23)、職業については、経営者は労働者より強く(表1-24)、支持政党については、自民党支持層は、支持政党なし層、社・共支持層よりも強く、中道四党(公明党、新自由クラブ、民社党、社会市民連合)支持層は支持政党なし層よりも強い(表1-25)。

権威主義のパーソナリティと類似の傾向を示しているのは、支持政党のみである。

またNスコアの3点グループと0点グループの各質問についてのA平均スコアの差を検定すると、3点グループが0点グループより高い項目は、15項目中わずか5項目であった(表1-26)。

以上の結果から、本調査においても、ナショナリスティックな優越感は、権威主義のパーソナリティと、部分的に交差するが、別の軸であると言えるのである。

表 1-19 Nスコア×平均スコア

Nスコア	0点	1点	2点	3点
A平均スコア	-0.1	4.4	10.2	9.8
n	75	215	162	46
S.D	14.2	15.2	15.3	15.0

表 1-20 Nスコアと男・女

	男性	女性
N平均スコア	1.35	1.37
n	249	249
S.D	0.88	0.81

表 1-21 Nスコアと年齢

	20代	30代	40代	50代	60代以上
N平均スコア	1.16	1.40	1.48	1.51	1.39
n	150	117	95	63	76
S.D	0.82	0.85	0.86	0.81	0.83

表 1-22 Nスコアと学歴

	低学歴	中学歴	高学歴
N平均スコア	1.41	1.38	1.28
n	138	215	140
S.D	0.92	0.79	0.85

表 1-23 Nスコアと学歴

	旧 制			新 制		
	低学歴	中学歴	高学歴	低学歴	中学歴	高学歴
N平均スコア	1.54	1.51	1.33	1.27	1.32	1.27
n	74	61	24	64	154	116
S.D	0.92	0.72	0.85	0.91	0.81	0.85

表 1-24 Nスコアと職業

	公務	自営業者	労働者	管理職 経営者	家庭婦人 (主婦)	学生	無職	内職, パート, アルバイト
N平均スコア	1.50	1.57	1.26	1.45	1.44	0.94	1.36	1.35
n	28	42	180	47	115	16	39	26
S.D	0.91	0.90	0.86	0.77	0.81	0.75	0.89	0.68

表 1-25 Nスコアと支持政党

	自 民	社・共	中道四党	支持政党 なし
N平均スコア	1.58	1.31	1.39	1.16
n	155	67	94	171
S.D	0.81	0.80	0.90	0.82

表 1-26 Nスコア 3点グループと 0点グループのA平均スコアの差の検定

順位	Q	t	危険率	順位	Q	t	危険率
1	Q11	4.48		9	Q 3	1.69	0.05以上
2	Q13	2.49		10	Q 9	1.25	
3	Q 2	2.23		11	Q 7	0.74	
4	Q12	2.20		12	Q17	0.67	
5	Q 6	1.98	0.05未満	13	Q 8	0.61	
6	Q 4	1.88	0.05以上	14	Q18	0.45	
7	Q14	1.83		15	Q16	0.26	
8	Q19	1.81					

5. おわりに

これまで述べてきた日本人の権威主義のパーソナリティと社会的属性との関係をごく簡単に要約すると、次のようにになる。ただしここで扱う権威主義のパーソナリティの強度は各集団の平均である。

1. 男・女の差については、女性は男性より権威主義のパーソナリティが強い傾向が見られないでもないが、今回の調査のみでは断定できない。その理由の一つに男性と女性の権威の対象に大きな差があることがあげられる。
2. 年齢については50代を除いて、高年齢になるほど権威主義のパーソナリティが強くなっている。
3. 学歴については、全体的にみれば、低学歴になるほど権威主義のパーソナリティが強くなっている。しかし今回の調査では詳細に分析すると、戦前のような権威主義社会において獲得した高学歴は中学歴に比較して弱いとは言えない。

4. 職業については、無職、自営業、小企業主は権威主義のパーソナリティが強く、また大企業、大団体に勤めている人よりも小企業、小団体に勤めている人の方が強い。全体的にみれば、旧来の家族制度的擬制が残存している職業ほど、経営者、労働者を問わず強くなっている。
5. 支持政党については、権威主義のパーソナリティは自民党支持層が社会党支持層、支持政党なし層、中道四党支持層よりも強い。ただし、革新性が強いと言われている政党支持者になるにつれて必ずしも弱くなるとは言えない。
6. 信仰については、「神仏を同時に信仰している人」は、「神仏以外を信仰している人」、または「無信仰者」よりも権威主義のパーソナリティは強い。
7. 身分・地位に関する価値観については、非合理的な価値観を所有しているほど、権威主義のパーソナリティは強い。
8. ナショナリスティックな優越感については、ナショナリスティックな優越感の強い人は弱い人よりも権威主義のパーソナリティは強い傾向にある。しかしこれらの強度は互いに比例するものではない。これは、ナショナリスティックな優越感と権威主義のパーソナリティは、部分的には交差するが、同一軸上にはないためである。

従来のこの種の研究において言われてきたことは、職業については、職人、管理、工員の権威主義のパーソナリティが強く¹⁴⁾、年齢については、「四十代以上では統計的に有意差ではなく、四十代、三十代のあいだ、三十代と二十代のあいだというように比較的若い世代——これらの世代は、大正後期から昭和という近代思想の輸入開花の時代にその青年期を送ってきた——のあいだに差がある。」¹⁵⁾(城戸浩太郎, 1970, p.121~122), 学歴については、「学歴が高いほど、反権威主義的傾向が強くなる……Aスケール（権威主義を測定するものさし）¹⁶⁾では小卒と高小卒、高小卒と中卒のあいだを除いて、相互のあいだに有意差がある。」(同, p.121), 支持政党については、「保守政党支持者ほど伝統的権威主義への志向が強く……」(同, p.122)というものであった。

したがって先に述べた男女の性差、信仰、身分・地位に関する価値観、ナショナリスティックな優越感についての関連は、今回の調査で新たに明らかにされたものであり、年齢、学歴、支持政党については、少

なくとも現在においては、従来の説は修正される必要があろう。城戸達の説との相違は、スケールを作成した時代と調査対象の相違によることはもちろんあるが、そればかりではないように思われる。彼らが作成したスケールには、私の作成したスケールに比較して、被調査者がパーソナリティに基づいて回答するよりは、表面的な知識や思想により回答すると想像される質問が多く含まれていた。このことが、高学歴や革新政党支持者ほど低スコアになった大きな要因になったと考えられる。

しかし今回の調査研究にも問題点はある。Aスケール作成において、表面的な知識や思想によって回答される傾向の問題はできる限り回避したが、まだまだ完全なものであるとは言えない。また各質問に対して落とされた得点が等間隔であることも改良されなければならない。さらに、権威主義のパーソナリティと社会的属性についても、年齢との関係における50代のように、未だ解決していない問題がいくつか残されている。

〔注〕

- 1) 城戸浩太郎「イデオロギーとパーソナリティ」、『社会意識の構造』、1970, p. 7~17 参照。
- 2) a. Conventionalism. Rigid adherence to conventional, middle-class values.
b. Authoritarian submission. Submissive, uncritical attitude toward idealized moral authorities of the ingroup.
c. Authoritarian aggression. Tendency to be on the look out for, and to be condemn, reject, and punish people who violate conventional values.
d. Anti-intraception. Opposition to the subjective, the imaginative the tenderminded.
e. Superstition and stereotypy.
The belief in mystical determinants of the individual's fate; the disposition to think in rigid categories.
- f. Powar and "toughness". Preoccupation with the dominance-submission, strong-weak, leader-follower dimention; identification with power figures; overemphasis upon the conventionalized attributes of the ego; exaggerated assertion of strength

- and toughness.
- g. Destructiveness and cynicism.
Generalized hostility, vilification of the human.
 - h. Projectivity. The disposition to believe that wild and dangerous things go on in the world; the projection outwards of unconscious emotional impulses.
 - i. Sex. Exaggerated concern with sexual "goings-on".

[T. W. Adorno, 1950, p. 228]

- 3) 1)の文献の他、「マス・コミと伝統的価値態度」、『東京大学新聞研究所紀要』4, 1955, 「伝統的価値態度」、『思想』第373号, 1955, 参照。
- 4) ここでは、権威主義の性向の形成過程を述べることは小論の主題からはずれるが、「過度の伝統的価値態度」についてのみ、簡単に触れておく。

「反内省」は、創造力や理性的思考能力を退化させ、自律性の欠如を招来するため、社会的因習とか習慣などの伝統に従った既成の行動様式への依存の傾向が強化され、「過度の伝統的価値態度」が生じる。これらへの依存は、個人の社会的・政治的責任の回避、あるいは軽減を可能にする。

この場合、個人にとって、彼が服従する社会的因習、習慣などの伝統が合理性や正当性を保有しているか否かは重要ではなく、ただ型にはまつたことを判で押したように反復することが目的となる。彼は彼の行動の理由を伝統に依拠して説明する。

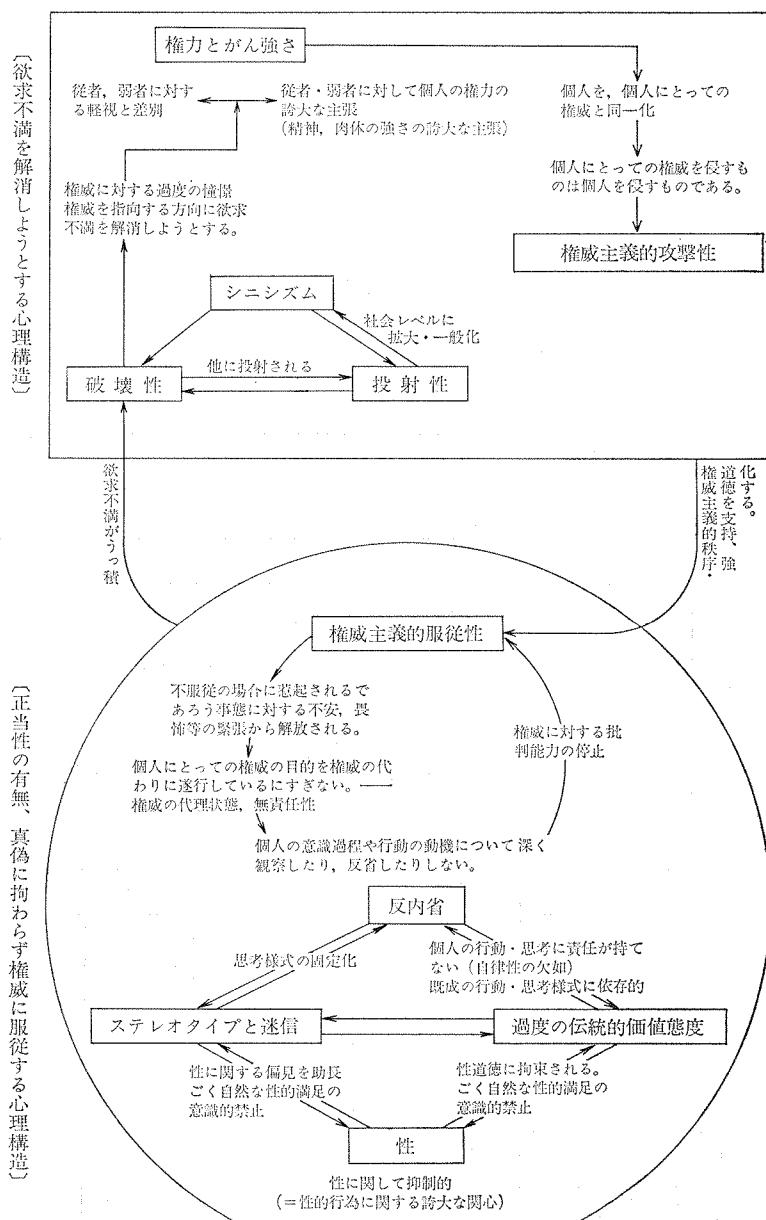
むろん伝統的価値態度は、その伝統が客観的な合理性や正当性を保有しているものであれば、問題はないが、非合理的な伝統が権力とからみ合っている場合は、権力に利用され、権威主義社会の秩序を維持し、促進させる常套手段となる。

例えば、「自分の身を犠牲にして、天皇や一家の主人のいうとおりに尽くすことが、日本の最も美しい伝統だ。」とか、「日本を中心とした大東亜共栄圏という理想は、戦争には負けたけれども、考え方としては間違っていなかった。あれはあれでよき時代であった。」などという思考や態度として表現される。

「過度の伝統的価値態度」と他の権威主義の性向との関係をマッピング(mapping)すると、図2-1のようになる。

- 5) 本調査において、「Conventionalism」に関する質問項目、Q1「礼儀・作法・習慣のわるい人々は、礼儀・作法・習慣のよい人々とつき合っていない。」の弁別値は25.1で、「過度の伝統的価値態度」に関する質問項目、Q11「戦後、義理、人情の念がうすれたという声をよく聞くが、こう

図 2-1 権威主義の性向の相互関係



いう日本古来の道徳を、今後ももり立っていく必要がある。」、Q12「現在でも、よく職場では新入りのものがお茶をくんだり、上役の雑用を引き受けたりするシキタリがあるようだが、そういうことはだれかがやらなければならないのだから、新入りがやるのが当然である。」はそれぞれ、44.2, 52.5であった。

- 6) 東京都23区を対象とした今回の社会意識の調査の性別、年代構成比は表2-1、2-2のとおり、東京都の実際の性別、年代構成比とほぼ同一である。

表 2-1 性別構成比の比較 (単位: %)

	男性	女性	計 (基数)
東京都	50.0	50.0	100.0
東京都23区を対象とした社会意識の調査	50.1	49.9	100.0 (501)

東京都：1976年1月現在

表 2-2 年代構成比の比較 (単位: %)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	計 (基数)
男 性	東京都	32.5	24.2	19.3	11.2	7.9	4.9 100.0
	東京都23区を対象とした社会意識の調査	32.6	23.9	18.3	11.6	8.0	5.6 100.0 (251)
女 性	東京都	27.6	23.3	19.9	13.5	9.3	6.0 100.0
	東京都23区を対象とした社会意識の調査	27.2	22.8	19.6	13.6	10.0	6.8 100.0 (250)

表 2-3 支持政党構成比の比較 (単位: %)

	自民党	社会党	共産党	公明党	民社党	
東 京 都 (毎日新聞世論調査)	30.5	10.6	6.1	4.6	3.8	
	東京都23区を対象とした社会意識の調査	31.1	9.0	4.4	6.6	5.0
	新自由 クラブ	社会市 民連合	その他の 政党	支持政 党なし	D K	計 (基数)
東 京 都 (毎日新聞世論調査)	7.9	0.5	2.7	29.5	3.8	100.0
	東京都23区を対象とした社会意識の調査	6.0	1.4	0.8	34.3	1.4 100.0 (501)

(毎日新聞世論調査：1976, 7月1日～3日, 参議院選挙の10日前)

1976年7月1日～3日（参議院選挙の約10日前）に実施された毎日新聞の世論調査と比較すると、「支持政党なし」が今回の調査の方が5.8%多いだけで他はほとんど差が見られない。これまでの世論調査では、選挙直前は「支持政党なし」と回答する比率が減少するのが常であった。その辺の事情を考慮すると、今回の調査結果は、毎日新聞の世論調査とほぼ同一であると言える。

Q5 あなたは日本は一流国であると思いますか。

表 2-4

(単位：%)

	そう思う	そう思わない	わからない, DK
N H K 世論調査 東京都23区を対象とした 社会意識の調査	41.0	49.8	9.1
	37.7	48.7	13.6

Q10 あなたは、日本は今でも外国から見習うことが多いと思いますか。

表 2-5

(単位：%)

	そう思う	そう思わない	わからない, DK
N H K 世論調査 東京都23区を対象とした 社会意識の調査	70.0	19.4	10.5
	65.7	21.6	12.7

N H K世論調査：1973年、全国の15歳以上の男女を対象。n=4243。

- 7) Q1, Q15, Q20がこれらに相当する。後掲の単純集計表を参照されたい。
- 8) 被調査者の中から50名を無作為に抽出し計算した。
- 9) この種の尺度では、通常1点間隔が用いられるが、有意差をはじめとする検定上の便宜のために、2点間隔にした。
- 10)

表 2-6 身分・地位に関する価値観と性別

順位	男性		女性	
1 位	職業	20.8%	家庭	20.8%
2 位	その他	16.0	職業	20.6
3 位	財産	15.0	学歴	17.6
4 位	家柄	14.2	その他	13.2
5 位	収入	9.6	財産	11.0
6 位	学歴	9.2	有名	6.4
7 位	有名	7.0	収入	4.0

- 11) 新自由クラブを中道とすることには異論を唱える人もあるが、現在マス・コミ等では、公明党、民社党、新自由クラブ、社会市民連合（現在の社会民主連合）を中道四党と呼ぶのが一般的になっている。
- 12) R. P. Dore「学歴社会 新しい文明病」, 1973, p. 64を参照されたい。
- 13) 丸山真男「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」, 『現代政治の思想と行動』, 1964, p. 274を参照されたい。
- 14)

表 2-7 職業別のAの平均値と標準偏差
(1952年調査)

職業	N	Aの平均	S.D
専門	35	11.29	4.15
管理	101	14.60	4.28
事務	98	12.17	4.41
販売	61	12.33	4.31
工員	97	13.75	5.01
職人	76	15.05	3.89
学生	17	8.53	4.27

(調査対象：東京都民、20歳～60歳の男子)

出所：城戸浩太郎, 1970, p. 107.

- 15)

表 2-8 年齢別のAの平均値と標準偏差
(1952年調査)

	N	Aの平均	S.D
20代	197	11.73	4.48
30代	130	13.07	4.67
40代	103	14.63	4.03
50代	74	14.77	4.39
60代	30	15.87	4.12

出所：城戸浩太郎, 1970, p. 107.

- 16)

表 2-9 学歴別のAの平均値と標準偏差
(1952年調査)

学歴	N	Aの平均	S.D
小学卒	112	15.01	4.30
高小卒	139	14.16	3.84
中学卒	149	13.30	4.20
高専卒	46	11.98	3.82
大学卒	84	10.36	4.36

出所：城戸浩太郎, 1970, p. 102

単純集計表

(単位: %)

F 1 性 別

男性	女性	計(基数)
50.1	49.9	100.0 (501)

年 齢

20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	計(基数)
29.8-	23.4	19.0	12.6	9.0	6.2	100.0 (501)

F 2 学 歴

学歴なし	小学校	尋常高等 小学校	新制中学	旧制中学	新制高校
0.2	2.6	12.2	12.6	12.4	32.5
旧制高等 専門学校	新制大学	旧制大学	短期大学	その他・D K	計(基数)
3.0	16.4	1.8	5.4	0.9	100.0(501)

F 3 職 業

労 動 者				自営業 ・小企 業主	中企業の 経営者・ 管理職	大企業や 官公庁の 経営者・ 管理職
販売・サー ビス・一般 作業職	技能職・ 熟練職	事務職・ 技術職	専門職			
11.6	13.0	12.2	5.8	11.0	4.0	2.2
パート・ アルバイト・内職	家庭婦人 (主婦)	学生	無職	分類不 能・そ の他	計(基数)	
5.2	23.0	3.2	8.0	0.8-	100.0 (501)	

販売・サービス・一般作業職：物品などの販売や、各種のサービス提供に直接従事する勤め人、および特に知識や熟練を必要とせず、主に身体を使い、短期間で修得できる技能で行われる仕事の勤め人。

技能職・熟練職：一定水準の技能を必要とし、熟練・経験によって行われる仕事の勤め人。

事務職・技術職：一般的な事務およびやや専門的分野で主として頭脳労働的に行われる業務に従事する勤め人。

専門職：特殊な専門分野で高度な知識、資格、経験をもって業務を行っている勤め人。中企業の経営者・管理職：従業員30人以上1,000人未満の規模の企業、団体で、経営や管理を行う人。

大企業・官公庁の経営者・管理職：官公庁、従業員1,000人以上の規模の企業、団体で、経営や管理を行う人。

自営業・小企業主：従業員30人未満の規模で、商工・サービスなどの業を行う事業主。家庭婦人：職業をもたず、主として家事に従事している女性（単身者は除く）。

学生：学生で職業を持つ者も含む。

無職：職業の定義に当てはまらず、かつ、「家庭婦人」、「学生」に属さない人。

その他、分類不能：上記のいずれの分類にも該当しない人等。

F 4 住 宅

持 家	公営の借家	民間の借家 間借	給与住宅	その他・DK	計(基数)
58.1	6.8	20.6	12.0	2.5	100.0(501)

給与住宅：社宅、公務員住宅等。

Q 1 あなたは礼儀・作法・習慣のわるい人々が、礼儀・作法・習慣のよい人とつき合っていいかだと思いますか。つき合っていけないと思いますか。

1. つき合 っていいか りでいい けん	2. ほとん どつき合っ ていける	3. どちら ともいえな い	4. ほとん どつき合っ ていけない	5. つき合 っていけな い	DK	計 (基数)
23.1	19.2	25.8+	20.0	11.3	0.6	100.0 (501)

Q 2 あなたは、「政治のことは政治家にまかせておくべきで、国民は自分の仕事に専念すべきである。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえな い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
9.6	16.8	12.0	28.3	32.9	0.4	100.0 (501)

Q 3 あなたは、「現在の若者はあまりにも柔弱に（よわよわしく）なりすぎているので、もっときびしいたんれんと仕事に対する意欲が必要である。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえな い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
48.9	24.6	18.7-	4.8	2.6	0.4	100.0 (501)

Q 4 あなたは、「困ったことや苦しいことがあるときは何も考えないで愉快なことに熱中するのがもっともよい。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえな い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
18.2	22.4	21.2	20.0	18.0	0.2	100.0 (501)

Q 5 あなたは日本は一流国であると思いますか。

1. そう思 う	2. そう思 わない	3. わから ない	D K	計 (基数)
37.7	48.7	13.4	0.2	100.0 (501)

Q 6 あなたは、「人の一生は生まれたときからもはや運命によってきめられているものである。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえま い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	D K	計 (基数)
8.6	17.8	19.1	22.4	31.7	0.4	100.0 (501)

Q 7 あなたは、「人間は生まれつき能力にちがいがあるのだから、能力のあるものが能力のないものの上に立つ（支配する）のは当り前である。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえま い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	D K	計 (基数)
10.4	24.8	15.1-	18.6	30.5	0.6	100.0 (501)

Q 8 あなたは、「戦争は人間の本能に深く根ざしたものだから（たとえ社会制度が変わっても）戦争を世の中からなくすことはできない。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえま い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	D K	計 (基数)
6.6	18.6	17.5-	17.2	39.5	0.6	100.0 (501)

Q 9 あなたは、「婦女暴行などのような性犯罪を犯した者は、公衆の面前でのむち打ち、あるいはそれ以上の刑罰を受けるべきである。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちら かといえま い	3. どちら ともいえな い	4. どちら かといえな い	5. 大いに 反対	D K	計 (基数)
33.9	24.6	17.5-	13.2	10.2	0.6	100.0 (501)

Q10 あなたは、日本は今でも外国から見習うことが多いと思いますか。

1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない	D K	計 (基数)
65.7	21.6	12.1-	0.6	100.0 (501)

Q11 戦争後、義理、人情の念がうすれたという声をよく聞きます。あなたは、こういう日本古来の道徳を、「今後も、もりたてていく必要がある」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに賛成	2. どちらかといえば賛成	3. どちらともいえない	4. どちらかといえば反対	5. 大いに反対	D K	計 (基数)
49.9	30.3	15.2	3.2	1.2	0.2	100.0 (501)

Q12 現在でも、よく職場では新入りのものがお茶をくんだり、上役の雑用を引き受けたりするシキタリがあるようです。これについて、「そういうことはだれかがやらなければならないのだから、新入りがやるのが当然だ。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに賛成	2. どちらかといえば賛成	3. どちらともいえない	4. どちらかといえば反対	5. 大いに反対	D K	計 (基数)
20.0	33.5	19.9-	14.6	11.8	0.2	100.0 (501)

Q13 あなたは、「国の発展のためには、少数の人々が犠牲になることは、現実としては止むを得ない。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに賛成	2. どちらかといえば賛成	3. どちらともいえない	4. どちらかといえば反対	5. 大いに反対	D K	計 (基数)
6.0	22.0	20.1-	21.6	29.9	0.4	100.0 (501)

Q14 あなたは、「両親に対して、愛情と感謝と尊敬の念を感じることのない人は、もっとも劣等な人間である。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
43.1	27.7	19.0	6.0	3.8	0.4	100.0 (501)

Q15 あなたは、「ありふれた探偵小説や冒険物語からでも、ほかの文学書以上の教養と知性を得ることができる。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
16.4	26.3	35.7	13.8	6.8	1.0	100.0 (501)

Q16 あなたは、「どんなに科学が進歩しても手相やうらないもばかにできない。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
14.4	28.7	25.9	17.2	13.8	0	100.0 (501)

Q17 あなたは、「もし顔に泥をぬられた（名譽が傷つけられた）場合には、あくまでも汚名をそそがなければならない。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
27.3	28.1	28.4 ⁺	10.6	4.8	0.8	100.0 (501)

Q18 あなたは、「人を見たら泥棒と思え、ということはあるとおり、私どものまわりには危険なものがあふれていますので、少しの油断もできない。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
22.0	30.9	20.7 ⁻	20.2	6.2	0	100.0 (501)

Q19 あなたは、「若い独身の女性が、何人かの男性と肉体関係を持つのは、犯罪的である。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
20.4	14.4	34.0	21.6	9.6	0	100.0 (501)

Q20 あなたは、「男の子にも、女の子と同じように炊事や洗濯などの家庭の仕事を手伝わせた方がよい。」という意見に賛成しますか。反対しますか。

1. 大いに 賛成	2. どちらかといえれば 賛成	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 反対	5. 大いに 反対	DK	計 (基数)
20.4	27.3	17.1	21.8	13.4	0	100.0 (501)

Q21(a) あなたは天皇は必要であると思いますか。必要でないと思いますか。

1. 必要で ある	2. どちらかといえれば 必要である	3. どちらともいえない	4. どちらともいえない 必要でない	5. 必要で ない	DK	計 (基数)
37.1	22.6	20.7	8.0	11.4	0.2	100.0 (501)

(a)で「1. 必要である」、「2. どちらかといえれば必要である」と答えた人のみ(b)の質問にお答えください。

(b) なぜ必要であると思いますか。次の中からあなたの考えにもっとも近いものを一つだけ選んでください。

1. 国の政治のまとまりを保つために天皇は必要である。
2. 戦争後、われわれの道徳やものの見方がずいぶん混乱してきたので、天皇を中心とした道徳で国民の気持ちをひきしめるため必要である。
3. 日本国民統合の象徴のため必要である。
4. その他〔記入〕:

1. 政治的シ ンボルとして	2. 道徳的シ ンボルとして	3. 象徴とし て	4. その他 DK	計 (基数)
11.2	9.4	36.5	2.6	59.7 (299)

Q22 つぎの中であなたが信じているものがありますか。あればいくつでもえ

らんでください。

- | | | | | | | |
|------|------|-------|---------|-------------|-------------|--|
| 1. 神 | 2. 仏 | 3. 奇跡 | 4. 易や占い | 5. お札やお守りの力 | 6. 何も信じていない | |
|------|------|-------|---------|-------------|-------------|--|

1. 神	2. 仏	3. 奇跡	4. 易や占い	5. お札やお守りの力	6. 何も信じていない	DK その他	基數
35.9	39.1	23.4	13.6	15.0	28.1	4.0	501

Q23 世間では一般に、ある人の地位や身分が高いとか、低いとか いいます
が、それは一体なによってきまるのでしょうか。次の中から二つ選んでください。

- | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--|
| 1. 職業 | 2. 学歴 | 3. 収入 | 4. 家柄 | 5. 有名 | 6. 財産 | 7. その他 | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--|

職業	学歴	収入	家柄	有名	財産	その他	DK	計 (基數)
20.7	13.4	6.8	17.5	6.7	13.0	14.6	7.3-	100.0 (1001)

Q24 あなたは、日本人は他の国民と比べてすぐれた素質をもっていると思
いますか。

1. そう 思う	2. そう 思わない	3. わか らない	DK	計 (基數)
76.6	9.2	14.0	0.2	100.0 (501)

Q25 あなたは現在、どの政党を支持しますか。

1. 自民	2. 社会	3. 共産	4. 公明	5. 民社	6. 新自 由クラブ
31.1	9.0	4.4	6.6	5.0	6.0
7. 社会市 民連合	8. その他	9. 支持政 党なし	DK	計 (基數)	
1.4	0.8	34.3	1.4	100.0 (501)	

<主な参考文献>

Adorno, T. W., Brunswik, E. F., Levinson, D. J., Sanford, R. N., *The Authoritarian Personality*, American Jewish Committee, 1950.

- Bochenski, J. M., 丸山豊樹訳『権威の構造』公論社, 1977。
- Friedrich, C. J., 三邊博之訳『伝統と権威』福村出版, 1976。
- Fromm, F. E., *Escape From Freedom*, Fifteenth Printing, Avon Books, 1965。
- 城戸浩太郎『社会意識の構造』新曜社, 1970。
- Milgram, S., 岸田秀訳『服従の心理』河出書房新社, 1975。
- 西田春彦, 新陸人編『社会調査の理論と技法 I・II』川島書店, 1976。
- Reich, W., *The Mass Psychology of Fascism*. Reprint, Pelican Books, 1980.
- Riesman, D., *The lonely Crowd*, Thirty-second printing, Yale University Press, 1977。
- 安田三郎『社会調査ハンドブック』新版, 1974。
- Dore, R. P., 松居弘道訳『学歴社会 新しい文明病』岩波書店, 1978。
- 上条末夫『政治意識の構造』北樹出版, 1978。
- 丸山真男『現代政治の思想と行動』増補版, 未来社, 1964。
- 作田啓一『恥の文化再考』筑摩書房, 1967。